

「北方騎馬民族のかがやき」展に関する覚書

飛鳥資料館では、平成21年10月16日から11月29日まで秋期特別展「北方騎馬民族のかがやき 三燕文化の考古新発見（以下、三燕と略）」展を開催した。その始末について記録しておきたい。

きっかけ 飛鳥資料館では、奈文研が進めている海外の調査研究機関との共同研究の成果について、実資料の展示を通じて分かりやすく公開することを目的に、中国社会科学院考古研究所とおこなっていた唐長安城大明宮太液池遺跡に関わる共同研究の成果を展示する特別展「東アジアの古代苑池（以下、苑池と略）」（平成17年10月22日－12月11日）を開催した。その後、平成18年には河南省文物考古研究所から、同所などとおこなっていた河南省鞏義黃治唐三彩窯跡の共同研究の成果を展示する展覧会の開催希望が寄せられたことから、「まぼろしの唐代精華－黃治唐三彩窯の考古新発見（以下、唐三彩と略）」展（平成20年10月17日－12月7日）を実施することが決定されていた。

ところで、中国での共同研究は、遼寧省文物考古研究所とも実施しており、「3－6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究」が終了し、「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」が進められている。このため、前者で対象となった三燕文化に関する展覧会について、奈文研内部で検討をおこない、平成21年度に実施することが決定されたので、展覧会の開催と協力を遼寧省文物考古研究所に打診したところ、同所から同意する旨の回答が寄せられた。

準備 遼寧省文物考古研究所の同意を受け、飛鳥資料館では、ただちに準備が始まった。まず、展覧会のタイトルを「三燕文化の考古新発見」と仮称した上、未発表資料は海外の展覧会には出陳できないという中国の国内規定を考慮し、『三燕文物精粹』で報告された資料の中から展示品を選択することとした。また、三燕文化、そのものが一般には、まったくなじみがないものであることから、三燕とその文化を明瞭に示すとともに、専門家が熟観する価値をもあわせもつ、できるだけ多様な展示品を展示するという方針を立て、共同研究プロジェクトチームとの綿密な打ち合わせのもと、展示品の選択をおこなった。これは、「苑池」、「唐三彩」両展の展示品選

択では、各プロジェクトチームとの協議に必ずしも十分な時間をかけられなかつたという反省を踏まえている。さらに、各級文物の海外持ち出し制限、飛鳥資料館の展示スペースおよび展示ケース数、輸送や保険に関わる経費なども考慮し、40セット82点という展示希望品リストを作成した。

そして、この展示品リストと「苑池」、「唐三彩」展の協定書をもとにあらたに作成した三燕展協定書案を携えて、平成20年3月、加藤が、田辺征夫所長、小林謙一部長（当時）とともに訪中し、実質的な協議と展示品の調査を開始した。この際、展示品については、若干の変更をおこなった後、中国側の了承を得られた。また、協定書案については、開催期間、展示と撤収、開会式にともなう招聘者数と招聘条件、展示品輸送のルートなど、具体的な事項を決めるとともに、若干の文言を修正した上、合意に達し、後日、審査のために国家文物局に提出された。なお、実質的な協議は、遼寧省博物館、遼寧省文物考古研究所とおこなったが、展覧会の主催は遼寧省文化庁（文物局）となっている。これは、博物館、研究所には海外展の実施を含む渉外的な権限がないことによる。

図録の編集 続いて、大きな仕事になったのは図録の編集。ここで、展覧会のタイトルでもある図録のタイトルが問題となった。三燕文化、慕容鮮卑、五胡十六国などのキーワードは、一般になじみがないということで、軒並NGとなり、結局、苦心の末、案出した「北方騎馬民族のかがやき」が、採用された。

図録に必要な遺物の写真撮影は、遼寧プロジェクトのメンバーである牛島茂専門職員に依頼した。また、展示や図録の内容に幅をもたせるため、三燕の本拠地であった遼寧省朝陽市に所在する北塔や北票喇嘛洞墓地、馮素弗墓など周辺の遺跡の現状の写真も撮影していただいた。野外では、改装中のアパートの屋上にのぼってもらったり、激しいわか雨に襲われたりなど、ご苦労をおかけしたが、遼寧省文物考古研究所の穆啓文撮影師との息のあったコンビプレーによって素晴らしい写真となった。

図録については、三燕とその文化について読者に知っていただくこと、遼寧プロジェクト参加者を中心に論考をつくり、最新の三燕文化研究を掲載すること、遼寧プロジェクトなど、奈文研が継続的に海外で共同研究をおこなっていることを認知していただくことなどを編集方

針とし、田立坤「遼寧西部の三燕と日本の古墳文化」、小林謙一「日中共同研究の歩み」、花谷浩「三燕の馬具」、豊島直博「三燕の鉄製武器」、金田明大「三燕の土器・陶器」、白杵勲「東アジアにおける三燕文化」の玉稿を各氏から賜るとともに、飛鳥資料館でも丹羽崇史「三燕の金属製品－金製歩搖・帶金具・青銅容器－」、成田聖「朝陽北塔にみる三燕故都龍城」を執筆した。

開催 展覧会開催にむけて着々と準備は進んだが、肝心の国家文物局の承認が遅れ、会期や展示品などの最終的な確定ができなかった。これは、いくつかの展示品が国内未発表で、かつ、指定文化財の海外輸出数量の制限にひっかかる恐れがあったことで、遼寧省側と国家文物局との間で調整がおこなわれていたためだった。最終的には、展示品リストから数点を外し、39セット82点とすることで、7月末に、ようやく許可が下りた。

続いて、起こったのは、瀋陽—関空間の日本系航空会社の直行便の廃止による輸送ルートの変更であった。中国系航空会社は運航していたが、使用機体（B737）が小さく、展示品を収容した木箱が入らない可能性があったので断念し、陸路、美専車で北京まで運び、北京首都空港から関西空港に空輸することとした。

また、来日直前になって、こちらから送った招聘書類にミスがあったことで、中国側点検・展示指導要員にビザがおりないというハプニングも発生した。

このような問題があったものの、9月22日には、飛鳥資料館2名、美術運送会社1名が訪中、瀋陽の遼寧省博物館で展示品の点検、梱包作業をおこない、29日、万雄飛（遼寧省文物考古研究所）、蘭新建（遼寧省博物館）、李国学（朝陽市博物館）の3名、そして展示品とともに帰国した。そののち、無事に展示作業も終了させ、10月16日の開幕式を迎えることができた。

開幕式には、遼寧省文化庁の郭興文庁長、張暉琳副處長、遼寧省文物考古研究所の田立坤所長、遼寧省博物館の劉寧副館長、朝陽市博物館の尚曉波館長が遼寧から参加し、郭庁長と田辺所長による開門宣言で展覧会が開始された。また、翌17日には、日中記念講演会を資料館講堂でおこなった。講師と演題は、町田章・前奈文研所長「倭に渡來した三燕の文物 鞍橋の文様を分析する」と田立坤所長「三燕文化研究を回顧する」であり、各地から127名という多くの方々が集まった。その中には、日・

中・韓の著名な研究者もお見かけし、本展覧会に対する関心の高さがうかがわれた。

展覧会の会期は45日間、参觀者数は11,606名、いつも増して、内外の研究者の方々の来館が多かった。また、図録に関する海外からの問い合わせも多数あった。

閉幕にあわせて来日された陸博・張桂霞（遼寧省文物考古研究所）、邱菊（遼寧省博物館）の点検、梱包指導を受けながら、作業を終わらせ、いよいよ返却となったが、そこで、悪天候におそわれた。12月2日、関西空港から北京へ展示品とともに赴く予定であったが、華北地域が広範に濃霧に覆われ、搭乗予定の便が大幅におくれた。報道によれば、この濃霧は、数日間続いており、その間、航空路線は大混乱であったという。それでもフライトキャンセルにはならず、なんとか北京についたが、今度は、中国東北地方一円に暴雪警報が出され、瀋陽までの飛行機が飛ぶかどうかわからないという。恐る恐る北京首都空港に行くと、搭乗予定の飛行機には遅れもなく、キツネにつままれたような感じもした。しかし、瀋陽のホテルにチェックインしたとたんに大雪が降り始めた。そこで心配になったのは、陸路、美専車で運ばれている展示品。大雪の夜に、外に出てみたものの、美専車の到着は確認できず、心配が募った。翌朝、白銀の世界の中、雪がつもった美専車をみつけた時には、思わず、安堵の声を出してしまった。運転手の話によれば、積雪や事故による道路の閉鎖などで、明け方近くについたという。

返却作業は大した問題もなく、12月5日に終了した。実は、一部展示品については、遼寧省博物館で展示していたり、他館に貸出中であったりしたことから、事前調査できなかったため、通常であれば借用をためらうようなものもあり、飛鳥資料館と遼寧省博物館での梱包、開梱、点検作業は、かなり緊張し、胃が痛かった。また、ここで記してきたような種々のアクシデントやハプニングがあったので、中国側から「返却終了、問題なし」と告げられた時は、本当に肩の荷が下りた思いがした。おわりに 飛鳥資料館では、過去3回、海外からの借用品の展覧会を開き、ノウハウが蓄積されてきている。それをもとに、これからも海外共同研究の成果を展示していきたい。

（加藤真二・成田 聖・丹羽崇史）